

<http://www.kanagawa-la.jp>

Kanagawa Library Association

巻頭言 県立図書館そして神図協の行方	1
第 14 回図書館総合展 フォーラム報告	2
ブース展示報告	3
研修会レポート③「子ども読書活動推進フォーラム」に参加して	4

県立図書館そして神図協の行方

企画委員長 横浜市中心図書館 坪内 一

会報 239 号に、平野会長が「図書館の行方と神図協」という巻頭言を寄せられている。パクリと謗られそうだが（そして新年号にはあまり相応しくないが）、今回の寄稿の標題として、私には今、この表現しか浮かばない。

神奈川県緊急財政対策の一環として県立図書館の閲覧・貸出機能を廃止、県立川崎図書館については「県立図書館等との集約化を含めた検討」をする、という説明は、県下市町村の図書館関係者のみならず、利用者、そして当の県立図書館職員にも大きな波紋を投げかけた。昨年 11 月 20 日に開催された「県立の図書館のあり方に関する意見交換会」では、サービス低下や市町村の負担増への危惧、県内ネットワークの充実や電子媒体などの新たなサービス開発への期待など、様々な意見が出された。県では、市町村図書館に対しアンケートを行ったほか、関係者を集めたあり方検討会を設置し、本年 5 月までに論点整理等を行うことになっている。神図協としても今後、この問題に対する意見あるいは要望を、何らかの形で取りまとめるべきではないかと、私としては考えている。

県立図書館を巡る問題は、実は多くの図書館が現下に抱えている問題の縮図である。そして神図協も例外ではない。年度初めの理事会で説明された今後の協会運営予算のシミュレーション結果は深刻であり、企業であれば倒産の危機に瀕していると言わざるを得ない。すでに一部改善が図られてはいるが、今後、事業内容等の根本的な見直しが必要と思われる。各方面からの積極的なご意見、ご提案をお願いしたい。

さて、11 月 20～22 日にパシフィコ横浜で開催された第 14 回図書館総合展は、来場者 27,000 人、フォーラム参加者 12,800 人を数えた（主催者確認）。神図協でも、広報委員会を核に各委員会の活動を紹介するブース展示を行い、また研修委員会では吉田右子さんの講演会を開催して、いずれも高い評価を得ることができた。関係者及び参加された方に改めて感謝したい。次回の図書館総合展は、同じ会場で本年 10 月 28～30 日の開催が決まっている。引き続き、この図書館界最大のコンベンションの場を有効に活用していきたいものである。

第14回図書館総合展 フォーラム報告

平成24年11月20日（火）から22日（木）の3日間、パシフィコ横浜にて開催された第14回図書館総合展にて、神奈川県図書館協会研修委員会は、11月20日（火）実施のフォーラム「北欧の図書館から学ぼう ～なぜ北欧の公共図書館には行列ができるのか～」を担当いたしました。

講師に筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授の吉田右子氏をお招きし、“空気のような存在”として社会的に認知され、生涯学習の拠点として住民から高い信頼を得ている北欧各国の公共図書館の様子を、著書『読書を支えるスウェーデンの公共図書館』『デンマークのにぎやかな公共図書館』や滞在時の経験を基に、豊富な写真とともにご紹介いただきました。当日は、168名のご参加をいただき、盛況のうちにフォーラムを終えることができました。以下、概要を報告いたします。



北欧の人々にとって自然が一番という考え方がある。障がいを持つ人が持たない人と同じように生活できる社会を目指す考え方。バリアフリーが徹底している。

北欧の公共図書館については、日本の図書館で

- ・老若男女問わず、日々押し掛ける
- ・本は買わないで図書館で調達する
- ・夏はみんな戸外にいるので図書館はからっぽという神話があったが、真実なのか？

北欧の図書館の全体のイメージは、おしゃべりや飲食が可能（静寂を保つ閲覧室や飲食禁止のコーナーが別に設けられている）で、開館時間は、平日は17時程度までが一般的と短め（夜は家族団欒を重視するお国柄のため）で、どの席にもコンセントがあってコンピュータが使えて、お金の授受がある（予約・延滞・弁償などにお金がかかるのは当たり前という感覚がある）。そして、座り心地の良い椅子や色彩感覚の研ぎ澄まされた書架や

床など、居心地の良い空間が広がっている。

司書はレファレンスを重要な仕事としており、番号札を配布して銀行方式で対応している。貸出返却はセルフ方式。

図書館に来ると思いがけず文化に出合える、そういう出会いを図書館は仕掛けている。

各図書館では様々な催しを行っており、そのプログラムは60ページくらいのボリュームになる。編み物カフェ、IT講座、語学講座など、地域のミーティングポイントを担っている。北欧には公民館がないので、その機能を図書館が担っている。

デモクラシーコーナーがあって議員が時間を決めてやってくる図書館もある。日本と違い、議員が地域の人を待っている。

作家と図書館との距離が近く、作家は気軽に図書館に出掛けていく。読者と直に接することができるので、作家にとって図書館に行くのは良いことと捉えられている。

フィンランドでは、職員が幸福でないとよいサービスはできないという考え方のもとに、館内の居心地の良い場所にスタッフルームが置かれる。

スウェーデンでは、地震がないため、書架にキャスターが付いており移動可能。閲覧室内に空間を作って講演会やコンサート、ダンス教室などのイベントが行われる。トイレは有料。

地下鉄の駅にある図書館では、開館時間以外も使えるインターネット端末を備えたラウンジがあり、映画や音楽をダウンロードすることもできる。

小さな街の図書館では、学校図書館と公共図書館が一つ屋根の下、というところもある。財政難のために地域の分館が閉鎖され学校図書館と一緒にになっているところ、意識的に学校図書館と共に運営されているところがあるが、そのような地域では図書館は文化の拠点。非都市地域の小さな図書館にこそ、その国の図書館の本質は現れる。

子どもの読書離れは問題となっており、“10歳から13歳”という名の、その年代をターゲットとした特別な図書館や、高校生の通学バスに図書館の本を載せて自由に利用してもらう取り組み、配架の手伝いやポップ作りなどをする男の子図書館クラブなどの取り組みが行われている。

出版界と図書館界の距離も近い。スウェーデンには北欧各国同様作家への補償金制度があり、図書館で無料で読まれることによる損失を補てんしている。また、出版された本は図書館用にカラフルな製本テープで背が補強され、配架されるとあ

たたかみのある書架をつくり出す。

日本と共通して読書が好きな国民性で、書店のバーゲンやブックイベントなども大人気である。

図書館が社会に根付く秘密は子ども時代にあると思われる。保育園時代に定期的に図書館を訪問し、よみきかせをしてもらい、お昼もそこで食べて満足する。学校時代にはわからないことがあれば公共図書館へ行きなさいと促され、利用する。そして引退するとまた公共図書館へ戻ってくる。冒頭の北欧公共図書館神話であるが、実際は、

- ・利用者が押し掛けるわけではない
 - ・市民の読み物の調達先は図書館だけではない
 - ・“夏はからっぽ、冬は満員” なわけでもない
- でも存在感がある。なぜだろうか？

全ての人々に等しく情報・文化を受け取る権利があり、それを保障するのは公共図書館である、ということに住民が自覚しているのである。利用者の中心は子ども・高齢者・育児休暇取得者で、働く世代は図書館には行かれない。だからといって「公共図書館はムダ」とは誰も考えない。市民のライフサイクルに公共図書館が織り込まれ、人生のどこかで必ず行く場所と考えられているから。

市民がそのように考えている、ということが“公共図書館の強さ”である。北欧はサービスのレベルも普通である。だが、どこへ行っても同じサービスが受けられる、ということが世界一なのではないか。



イメージが湧くようなカラフルな写真と、ユーモアあふれる話しぶりで会場はまるで心地良い北欧の図書館にいるかのような雰囲気になりました。社会の意識は異なるかもしれませんが、北欧の公共図書館の良いところを取り入れ、存在自体が当たり前と認識してもらえるような図書館を目指していきたい、と強く感じました。

(神奈川県立図書館 菅井 紀子)

第14回図書館総合展 ブース展示報告

1999年に東京国際フォーラムを会場にスタートした図書館総合展も、第6回以降はパシフィコ横浜に会場を移し、今年で14回目を迎えました。(今回の総合展は、過去最高の27,357人の入場者があったそうです。)地元開催ということで、県図協広報委員会は今年もブース展示で参加しました。

東日本大震災の影響に関するアンケート(昨年)、図書館キャラクター(一昨年)など、近年はテーマ設定の企画展示を実施してきましたが、今回は、神奈川県図書館協会の諸活動をPRする、いわゆる「常設展示」風のパネル展示にしました。



使用したA1版パネルは、全部で7枚。①協会の組織・概略の紹介 ②加盟機関一覧 ③会議や表彰、講演会、『神奈川の図書館』編集業務を紹介した事務局パネル ④昨年度の研修写真と今年度の研修内容の研修委員会パネル ⑤協会報発行とホームページの運営管理の広報委員会と「電子書籍の提供」の調査研究に取り組む大学図書館委員会の共通パネル ⑥⑦既刊の『郷土資料集成』13冊などを紹介した郷土・出版委員会のパネルという構成です。また、ブースのコーナーに、協会の刊行物や各種パンフレットなども並べました。

神奈川県資料室研究会との共同出展という形で、ブース半分のスペースを使用した手作りパネル展示は、経費をかけて大規模に展開する企業のブースと比べて、かなり地味な存在です。それでも、3日間の会期中に310の方が協会のブースに立ち寄ってくれました。

「神奈川県では図書館協会という団体が、色々な活動をしているんですね。うちの県では聞いたことが無いな…」と来訪者が話していました。外部に情報発信する広報委員会の役割の大切さを再認識した、展示解説当番の一日でした。

(神奈川県立公文書館 佐々木 徹)

研修会レポート③ 「子ども読書活動推進フォーラム」に参加して

～もう一度言葉の意味を考えたい～

(10月27日実施)

平成24年10月27日(土曜日)、今年も読書週間が始まりました。その日「子ども読書活動推進フォーラム」が開催され、2階ホールは、ほぼ満席で、子どもの読書活動に携わる熱心な方々が参加されているようでした。

清水眞砂子氏の講演会が始まりました。演題は『「かわいい」ってなに？ー子どもと子どもの本を考える』ということで、“かわいい”という言葉の使われ方、“かわいい”に限らず、言葉がどのように使われているか、言葉を通して子どもがどのように扱われているか、子どもと大人との関係など、いろいろな本を例に挙げ、話していただきました。



まず始めに、清水氏は“かわいい”という言葉に、ずっと違和感を抱いていると言われました。

アーサー・ビナード氏の講演について触れ、言葉が乗っ取られていくことの意味を話されました。普段、何気なく使っている言葉について、元々の意味を考えて使っているのか、あるいは、使われ方によっては、本来の意味を失ってしまっているのではないかと、和製英語などを例に話をされました。話を伺い、気付かぬまま言葉を通して見えない何かに、いつの間にか支配されているのだろうかという怖い気がしました。

清水氏は、大学で授業を開始したときから、“かわいい”という言葉を使用しないように、学生に話しているそうです。当初の学生は、守っていましたが、現在では無理な状況とのこと。確かに、自分も含め、周囲からも、あらゆるメディアからも、やたらと“かわいい”という言葉が聴かれます。

例えば、子どもに対して使うとき、子ども＝弱者として接しており、それは、大人にとって都合が良く、大人としては子どもを、保護しなければならない弱者のままにしておきたいのではないかと。子どもにしても、“かわいい”と言われる方が都合よく、そのように計算しているのではないかと。

それは、障がい者に対する態度も同じ発想ではないかと、「青い芝の会」を例に挙げ話されました。“障がい者のくせに”“障がい者なのに”と、弱者として閉じ込めておくという意識が、子どもの本にも表れているのではないかと。

また、「ももたろう」や「ねむりひめ」を例に、赤羽末吉やホフマンの絵に対し、最近の絵と比較

してみると、最近の絵の方が、“かわいい”と好まれる。

しかし、子どもは本当に大人が思っているほど、弱い存在なのか。

実は、子どもは善悪の判断もできるし、自省する力もある。けれども、大人が、はっきりと判断することを避け、さまざまなことを、曖昧にしたままで、子どもに接しているのではないかと。

現在は、子どもを弱者として閉じ込めているような本が多く、そのような本ばかりでは、子どもの探究心や向上心を奪い、大事な子ども時代の時間を無駄にしている。大人が選ぶ本は、本当に子どもが好む本であるのか。さらに、子どもの真剣さに大人は応えているのか。ブックトークで選ぶ本にしても、子どもに媚びたりしていないか。

清水氏による多くの指摘により、本を選ぶことの責任の重大さを改めて感じました。図書館として、子どものためになる本を選ぶこと、同時に、子どもの周りの大人の方に、より良い本を選んでいただくための工夫が必要であると思いました。



清水氏の講演をまだまだ聴きたいところでしたが、第二部の事例発表が始まりました。

県立鎌倉高等学校図書委員会の代表3名がそれぞれに大型絵本のよみきかせを元気に公演されました。

次に、相のおはなし会から、2名の方が、ストーリーテリングをされました。秋田の言葉による秋田の昔話「三枚の札コ」には、その世界に思わず引き込まれてしまいました。「タカの巣とり」にしても、まさに物語の意味するところまで伝わってくるような語りでした。

最後に、「魔法の馬」のストーリーテリング。魔法の世界が目映るような語りに感動いたしました。良い本を選び、語り伝えることの大切さを再認識した、フォーラムでした。

(秦野市立図書館 吉岡伸恵)